

**永遠の旅人**

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。  
月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやつて来る年もまた旅人に似ている。

**船頭の人生****対句****馬子の人生**

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取つて老年を迎える馬子などは、

**昔の西行や杜甫**

日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。

毎日毎日が旅であつて、旅そのものを自分のすみかとしている。（風雅の道に生涯をささげた）昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。

**私**

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のわたしもいつのころからか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい

**が****「笈の小文」明石****あばら家**

思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に気持ちが動いてやまず、（近年はあちこちの）海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに（帰り）

**次第に****に**

蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、「春立てる霞の空に蜘蛛の古巣を払つて（住んでいるうちに）、次第に年も暮れ、新春となると、霞の立ちこめる空の下で

**を****引用**

白河の関越えん」と、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、

白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移つてただもうそわそわとさせられ、

道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れを道祖神が招いているようで、なにも手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたところを

を

つづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、繕い、道中笠のひもを付け替え、三里に灸をすえる（など旅の支度にかかる）ともう、

### 江上の破屋

松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、松島の月（の美しさはと、そんなこと）がまず気になつて、今まで住んでいた庵は人に譲り、

の  
杉風が別荘に移るに、  
杉風の別荘に移つたのだが、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

（元の草庵にも、新しい住人が越してきて、わたしの住んでいたころのわびしさとはうつて変わり、華やかに雛人形などを飾つている。）

表八句を庵の柱に懸け置く。

表八句を、（門出の記念に）庵の柱に掛けておいた。

# 夏草——「おくのほそ道」から——

授業プリント 3

(1) 「おくのほそ道」について答えなさい。

作者 ( 松尾芭蕉 ) 成立時代 ( 江戸 ) 時代

ジャンル ( 紀行文 )

芸術性の高い ( 蕉風 ) 俳諧

(2) 書き下し ( 古典かなづかい → 現代かなづかい ) をせよ。

過客

かかく

行きかふ

ゆきこう

とらへて

とらえて

迎ふる

むこうる

いづれ

いすれ

さそはれて

さそわれて

思ひ

おもい

さすらへ

さすらえ

江上

こうしやう

はらひて

はらいて

白河

しらかは

くるはせ

くるわせ

道祖神

どうそじん

あひて

あひて

付けかへて

つけかえて

灸する

きゅうする

まづ

まず

別墅

べっしょ

住み替はる

すみかわる

庵

いおり

(3) 意味を答えよ

百代

えいだい

過客

旅人

やや

次第に

住めるかた

住んでいた場所

永遠の旅人

ひやう

旅人

馬頭の人生

ばとう

馬の口

とらへて

老い

を迎ふる

馬子の人生

ばくしやう

馬の口

とらへて

旅に出たくて仕方のない気持ち

しおう

旅の支度

ももひき

（そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取

るものを手につかず）

かき

笠の緒付けかへて、三里に灸する）

（5）訳をしなさい

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

ひな

（元のわびしい草庵にも、新しい

住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしさとはうつてかわつてい

るなあ。今は華やかにひな人形など飾っている家になつてゐるよ。）

## は 一炊の夢

も

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。  
 藤原三代にわたつた栄華は一炊の夢のようにはかなく消えたが、今も  
 残る平泉間の南大門の後は、一里ほども手前にあつて、往時をしのぶ。

秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、  
 秀衡の居館跡はすでに田野になつていて、金鶏山だけが形を残している。  
 何をおいてもまず行きたかつた高館に登ると、

北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、  
 見える北上川は南部より流れる大河である。衣川は和泉の城をぐるりと  
 回つて、

高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて  
 高館の下あたりで大河（北上川）に合流する。泰衡たちの屋敷跡は、衣  
 が関をはさんで、

南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に  
 何部への出入口を固めて守り、夷を防ぐように見える。それにしても忠  
 義の家来を選んで義経はこの城に

## 杜甫「春望」

## 高館

を

こもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして  
 こもつて戦つたが、上げた手柄も一時のことで今はただの草むらになつ  
 ている。「国が破れても山河があり。城跡は春になつて

草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。  
 草は青くなつてゐる」と笠を敷いて、時が過ぎるまで涙を流してゐた。

を

が

夏草——「おくのほそ道」から——

授業プリント 5

切れ字

体言止め

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

切れ字

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

を

が

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は以前から耳にして驚いていた二堂が開帳していた。経堂は三将の像を残し、光堂は

三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破（藤原氏）三代の棺を納め、三尊の仏を安置している。七宝は散り失せて、宝珠の扉は風でいたみ、

れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぐ。しばらく千歳の記念とはなれり。金箔の柱は霜や雪に腐つて、どうに壊れて草むらになるところを、四面を新たに

になつた。

五月雨の降りのこしてや 光堂

切れ字 体言止め

# 夏草——「おくのほそ道」から——

授業プリント 6

(1) 書き下し (古典かなづかい→現代かなづかい) をせよ。

和泉 (いづみ) (えいえう) (まづ) (まづ)  
経堂 (きょうどう) (えいえう) (まづ) (まづ)  
七宝 (しちばう) (しちばう) (まづ) (まづ)  
覆ひて (おほひて) (まづ) (まづ) (まづ)  
城 (じょう) (じょう) (じょう) (じょう)  
兵 (ひょう) (ひょう) (ひょう) (ひょう)  
つわもの (つわもの) (つわもの) (つわもの) (つわもの)  
光堂 (ひかりどう) (ひかりどう) (ひかりどう) (ひかりどう)  
霜雪 (さうせつ) (さうせつ) (さうせつ) (さうせつ)

(2) 意味を答えよ

一睡のうち (夢のようにはかなく消えて) (一炊の夢) (ふまえ)  
義臣すぐつて (義経が) 忠義の家臣を選りすぐつて  
功名一時の叢となる (功名も一時のことで今は草むらになつた)  
時のうつるまで (時が過ぎるのも忘れて)

(3) 杜甫の「春望」を意識している部分を抜き出しなさい。

(国破れて山河あり、城春にして草青みたり)

(4) それぞれの俳句の季語・季節・句切れと鑑賞を答えなさい。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家 (ひな) (ひな) (季節) (春)

鑑賞 (草庵にも、新しい住人が越して、私の住んでいた頃のわび

しさとはうつてかわり、今は華やかにひな人形などを飾る家になつた。)

夏草や兵 (つはもの)

どもが夢の跡 (季語)

(夏草) (季節)

(夏) (季節)

鑑賞 (夏草 (がぼうぼうと茂つて) よ 武人たちの功名も一

時のはかない夢と消え、今はただ夏草が残るだけだ。)

卯の花に兼房見ゆる白毛かな (季語)

(卯の花) (季節)

(夏) (季節)

鑑賞 ((白い) 卯の花を見ていると 兼房が白髪を振り乱して戦

う悲壮な姿が浮かんでくるなあ

五月雨の降りのこしてや光堂 (季語)

(五月雨) (季節)

(夏) (季節)

鑑賞 (物を朽ちさせる五月雨 (梅雨) もここだけは降り残したの

か 光堂は昔のまま輝いている

さみだれ

五月雨の降りのこしてや光堂 (季語)

(五月雨) (季節)

(夏) (季節)

鑑賞 (物を朽ちさせる五月雨 (梅雨) もここだけは降り残したの

か 光堂は昔のまま輝いている

さみだれ